

『きみのそばにいたいから』

著：森本あき

ill：かんべあきら

北(ほっ)海(かい)道(どう)に来て、一緒に住んで、学部は別々だからそばにいられる時間はそんなにないけれど、それでも、部屋に帰ったら順之がいてくれる。もしくは、順之が帰ってくるのを待つことができる。

それを、当たり前だと思えなくて。

もしかしたら、ある日突然、順之は帰ってこなくなるかもしれない。理英のことをきらいになって、出ていくかもしれない。

そんな不安が、いまもまだ、あるからだろうか。

だから、この手を。

涙をぬぐってくれて、頬(ほお)を優しく撫(な)でくれる順之の手を。

特別だと、奇跡みたいだと、思ってしまうのだろうか。

じっと順之を見つめたら、順之が理英に微笑(ほほえ)み返して。

「ここにいるのになあ」

そうつぶやいた。だけど、理英は驚かない。

順之はすごく鋭くて、理英の表情の変化でいろんなことを悟ってしまう。そのことにも慣れてきた。

理英が何を考えて、どう感じてるのか、順之が分かって当然のことに思えてしまう。

それに甘えたくはないし、甘えるつもりもない。自分の気持ちは、ちゃんと言葉にした。

でも、こういう、言ってもいいかどうか分からないようなこと的时候は、その順之の観察眼がありがたい。

「うん、いるね」

頬を撫で続けてくれている順之の手に、自分のをそっと重ねた。

「順之が、ただいま、って帰ってきてくれる、それを俺がどれだけ幸せに思ってるか、順之は分かってる？」

「じゃあ、ぼくが、理英の、ただいま、を、どれだけ愛しく感じてるか、ちゃんと知ってる？」

理英の心が、ふわり、とほどける。

不安をなくしてくれるのは。怖い気持ちを取りのぞいてくれるのは。

いつだって、順之の言葉。

こうやって気持ちを伝えてくれる。順之よりははるかに鈍(にぶ)い理英に、きちんと教えてくれる。

そんな順之の優しさ。

「ね、だまされてるの話、長くなる？」

理英は順之の手を頬からはがすと、そのまま唇に引き寄せた。手の甲に、ちゅっ、とキスをして、順之を見上げる。

「長くしようと思えば、長くなる。短くしようすれば、きっと、理英は不満に思う。説明になってない、ってね」

「じゃあ、その中間ぐらいで。で、話が終わったら、俺のこと抱いて」

ちゅっ、ちゅっ、と手の甲から、裏返して手のひらへ、唇をずらすと、順之が、ふう、と息を吐いた。

「せっかく人がまじめな話をしようと思ってるのに、どうして、理英はいつもそうやって、ぼくの決心をムダにするかなあ」

「だまされた、って、俺がひとつ年上だったことでしょ？」

順之の驚いた表情を見て、理英は満足げに笑う。

「俺だって、そこまでバカじゃないよ。だました、っていうか、順之が、だまされた、って思うことはなんなんだろうな、って考えてみたら、それしか残らなかった。だいたい、だます以前に、順之とはあの顔合わせのときまで深く話したことはなかったんだし。だとしたら、うそをついた、っていうか、意図的に俺が隠してたことなんて、年齢のことしかないもん」

気づいたのは、いまだけど。生徒名簿で分かることといえば、父親の名前だけじゃなく、年齢もだ。

高橋さんのところには、順之よりひとつ年上の息子さんがいるのよ。

かつみがそう言ったとすれば、順之が、じゃあ、再婚相手は理英の父親じゃない、と思っても当然。

なのに、いざホテルに出向いたら、理英がいたとなれば、だまされた、と思うのもしょうがない気がする。

そう説明したら、順之が感心したようにうなずいた。

「理英って、ときどき、びっくりするぐらい理解力があがるよね」

「ときどき、って失礼なこと言うね」

理英は、わざとふくれてみせる。

もう大丈夫。

それを順之に伝えるために。

ここにいてくれる、そのことを奇跡だと思わない。いつものことだと。当たり前のことだと。そう受け止める。

そのことを、分かってもらうために。

順之が、もう一方の手で、理英の髪を撫でてくれた。それだけで安心する。

まちがってない。これでいい。

そう確信できる。

「じゃあ、いつも理解力がはんぱじゃなくいい理英には、これ以上の説明は不要かな？」

からかうように言われて。

ああ、ようやくいつもの雰囲気に戻ったんだ。

そのことを実感する。

「…ときどき、であってます」

理英が悔しまぎれにつぶやくと、順之が、え？ という顔で理英を見た。

「ごめん、聞こえなかった。もう一回言って」

「ときどきであってる、って言ったの！ どうせ、俺は鈍いよ！ 順之が言いたいことの

半分も分かってないよ！」

「半分かあ。大きくでたね」

くすくすと笑う順之に、理英はますますへそを曲げる。

「じゃあ、四分の一？ それとも、十分の一？ それどころか、まったく分かってない？
だったら、それでもいいよ！」

「冗談だよ」

順之は理英の髪から手を離して、理英がつかんでいた手のほうも引き抜く。

順之の温もりがない。

そのことを残念には思うけど。さっきまでみたいな不安は感じない。

うん、やっぱり大丈夫。

「半分よりは、もっとよく分かってくれる。理英がいてくれるから、ぼくはいつも安心して
いられるんだ。だから、そんなにすねてないで、ぼくの説明を聞いて。で、それを理
解したら、理英を抱かせて」

「…うん」

理英は順之にしがみつきたい衝動を、どうにかこらえた。ここで触れてしまえば、な
し崩しにそういうことになる。

それが分からないほど、鈍くはない。

だから、説明してもらって、あのときの自分も、あのときの順之も、おたがいにつか
ったのだときちんと胸に刻み込んで。

これからは、もう質問しなくていいように。傷ついたときのことを思い出さなくていいよ
うに。たまにふと心に浮かんできても、そういうことがあったなあ、と、まるで他人事み
たいに思えるように。

いま必要なのはセックスじゃない。

言葉だ。

「とりあえず、玄関から移動しようか」

「どこに？」

「ベッド」

いたずらっぽく目を細める順之は、きっと、冗談じゃないよっ！ という答えを待つて
るんだろうけど。

本文 p29～34 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>